

## 環境文明社会づくり あれこれ(22)

加藤 三郎

### 源流(22)

OECD ジャパン・レビューの貴重な置き土産となった「アメニティ」問題への対応は、素早く動き出した。その第一は、レビュー直後に就任した石原慎太郎 環境庁長官が立ち上げた懇談会での検討開始だ。

自ら選任した池田彌三郎、黒川紀章、小林忠雄、井深大、曾根綾子、堤義明ら 23 人の文化人で構成される「快適な環境懇談会」は、77 年 2 月から同年 5 月までの約 4 か月間に、長官も毎回参加し、「快適な環境とは」、「自然と都市のデザイン」、「騒音規制」、「ごみ問題」、「住環境と都市構造」、「快適環境を創造する心」をテーマに 6 回懇談した。そこでの発言要旨と参加者のアメニティに関する随想とを掲載して、『日本は快適か』と題する本が、日本環境協会から同年 7 月に素早く刊行。その序文で石原氏は、日本の高度成長期に自然環境だけでなく社会秩序を維持するための基本的な黙約すら崩壊したが、その決定的な原因は、産業化がもたらした「物神化」である旨を述べた上で、次のように主張している。

「考えてみれば、僅か百年間での社会の産業化という、国家的悲願なる公的目的のために、我々は、余りに私的な意味や目的を押え、犠牲にさえ供して来たのではなかろうか。そうした努力があって初めて達成された近代化であっても、その絶対値がここまで高められた今、我々は自らが成し終えて来たことへの歴史的批判を、まず何よりも己自身のために行うべき時に来ているに違いない。」「我々にとって、私にとって、果たしてこの日本は、私が私として生きていくために快適であろうか。否ならば、私はそれを克服するために、今何を拒否し、何を創り出さなくてはならぬのであろうか。」

政治家としての石原氏については、いろいろな評価があると思うが、ここに紹介した彼の文章を読み直しても、また後年に東京都知事になって国に先立って実行した「ディーゼル・バスやトラックの黒煙」の鮮やかな追放、また経団連や経産省に押し切られていつまでも国では実施できないでいる温室効果ガスの排出量取引などの断固とした導入を見ると、日本の政界で

は稀な環境(文化)重視政治家だったと私は評価している。今日、私たちが追求している「環境文明」社会に通じるものを感じる。

石原氏とは、その後も出会いが色々あったが、NPO となって毎日新聞社の企画で 22 人の著名な政治家や経営者にインタビューする機会があり、その一人として当時都知事であった石原氏にお目にかかった。冒頭で私が「ディーゼル車 NO 作戦はかくかくたる戦果ですね。」と語りかけたら、石原氏は「かくかくたる戦果どころか、いらいらしている。国の役人と、それに操られている政治家が鈍感で、遅い。役人も政治家も文明論を持っていないから、現状分析も現状認識もできない。人間はもともと保守的だから、自分がつくった技術体系が恐ろしい予想しなかった副次的なものをつくっても、気づきたくない。」と述べている(2000 年 7 月 17 日付紙面。01 年 5 月に『政財界リーダー 22 人が語る環境の世紀』と題して同社から刊行)。

